地域情報（県別）

【東京】足専門クリニックが2院目を荻窪に開院「さらなる認知度向上目指す」-吉原正宣・足と歩行の診療所院長に聞く◆Vol.2

2023年1月6日 (金)配信 m3.com地域版

「健康志向の高まりで足に関心を持つ人は増えている」。足の悩みやトラブルに対応する「足と歩行の診療所」（大田区）の吉原正宣院長は、開業して4年の手応えをこう感じる。患者からの紹介が増え、在宅医療とオンライン診療にも一定のニーズがある状況。全国的にも少ないであろう専門クリニックにはどんな悩みが寄せられ、吉原院長はどう診療を充実させてきたのか。そして今、思う課題は。（2022年11月11日インタビュー、計2回連載の2回目）

▼第1回はこちら

吉原正宣氏（本人提供）

――外来患者は40代以降が多いそうですが、どんな主訴が目立ちますか。

足が「痛い」「しびれる」「疲れやすい」といった訴えが多いですね。痛みの原因として最も多いのは外反母趾で、ほかには足裏の腱膜に炎症が起きてかかとが痛む足底腱膜炎、たこ、魚の目、巻き爪などが挙げられます。足の形が原因でしびれが起きたり、筋力低下や下肢静脈瘤、脊柱管狭窄症、扁平足などによって足が疲れやすくなっていたりする人も見られます。

最近は、患者さんが自ら病名を挙げることが増えてきました。他院で診断を受けたことでそう話す人もいますが、中にはインターネットの情報を根拠にする人もいるため留意が必要です。患者さん自身の見立てと私の診断結果が違った際、ショックを受けたり違和感を覚えたりするように見える方もいるので、医師としての説明力が問われてくるように思います。

――先生は開業時から在宅医療を行っていると聞きます。患者層を考慮してのことでしょうか。

それもあります。患者さんの中には「家ではなんとか歩けるけれど外出は難しい」人がいるので、そんな人も在宅下で診てあげたい思いがありました。そもそも、私が開業したのは患者さんに近いところで診療したかったためなので、在宅医療を行うのは希望をかなえる手段として自然なものでした。

患者さんのご自宅で診療していると、病院の診察室では分からないことがいろいろと見えるので視点が増え、その人の生活環境に合ったアドバイスもしやすくなります。例えば、家で座っていることが多い人であれば血流を良くするためにオットマンを置いて足を伸ばすことを提案したり、血流改善を図る体操を教えたり。私は勤務医時代に非常勤医として在宅クリニックで働いていたので、足に特化した在宅医療のニーズやメリットを開業前から知っていました。

――そして、2019年ごろにはオンライン診療も始めたとのこと。

開業してから少しずつ遠方にお住いの患者さんが増えていき、オンライン診療の必要性を感じるようになりました。インソールを作った後に使用感を尋ねたり、術後の経過観察をしたかったりする際にオンライン診療は有効だと感じています。足の症状が重い一方、対面診療の必要性が低い場合には良い方法でしょう。私としてもそんな人には無理なく受診してほしいので、在宅医療と同様に診療の選択肢が増えるのはうれしいことです。

現在、在宅医療では月に50人ほど、オンライン診療では月に10人ほどを診ています。

――全国的に少ないであろう専門クリニックが分院展開したのは印象的です。どんな流れだったのですか。

これは、出会いに恵まれました。整形外科を専門にする村井峻悟先生が足の領域にも関心があり、先輩医師から「指導をお願いしたい」と紹介されました。村井先生は勉強のため2020年に当院の診療に携わり、その後、駅に近い物件が荻窪に見つかったので「一緒にやっていきましょう」という話になりました。

――開業して4年が経ちます。専門クリニック運営の手応えと課題は。

当院が患者さんのファーストチョイスになることはまだ少ないですが、変化は感じています。他院に行ったものの悩みが軽減されず困っていた方がインターネットでクリニックを見つけてくれたり、当院を評価してくれた患者さんが周囲に紹介してくれたりと、患者さんの輪が広がってきている印象です。

課題はいろいろとありますが、優先順位の高いものとしては「分かりやすい説明」です。勤務医時代よりその技術が上がったと感じることはありますが、足に関する専門的な説明は患者さんの多くが過去にされてきていません。診療中は体の歪みや重心に関することなど、患者さんが想像しづらいことに触れる機会も多いので、いかにして腹に落ちるような説明ができるかは課題です。

患者さんの理解向上のため、患者さんが復習できるツールを導入したいとも考えています。一般的な医療機関では紙媒体を手渡すことが多いと思いますが、持ち運びには不便。高齢者にも普及してきているスマートフォンを使い、診療に関するデータをいつでも見直せるようにすれば良いのではないかと。構想はまだ具体化していませんが、例えば無料通信アプリ「LINE」で友達登録をしてくれた方に診療記録を送ったり、その人の問題と原因、改善方法が分かりやすくまとまったデータを添付したり。

カルテの内容をどんなふうにどこまで示すかにはさまざまな意見がありますが、個人的には医師だけでなく患者さんにも有効活用してもらいたいと考えています。診療内容を手軽に見返せる方法がないか検討したいですね。

――最後に、今後の展望をお聞かせください。

足を専門に診る領域があること、そして、それに注力する医療機関があることを一般の方と医療者の双方にもっと知ってもらいたいです。

医療的にはニッチな分野ですが、2019年に日本フットケア学会と日本下肢救済・足病学会が合併して「日本フットケア・足病医学会」が誕生するなど業界としてまとまっていこうとする機運があります。その一方で、一般の方も健康志向と健康寿命の高まりで足と歩行に関心を持つ人が増えているように思います。診療中にも感じることですが、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の流行に伴う外出自粛と運動不足により、ウォーキングの重要性を再認識した人は少なくないでしょう。

日本ではまだ、足の専門的な診療を受けるには大学病院などの大きな病院に行く必要性が高い状況です。もっと当院のような医療機関が増えて、将来的には「歯が痛くなったら歯医者に行く」のと同じように、「足が気になったら足専門のクリニックに行く」形になれば。そのためには医師が自身の専門性に足領域をアドオンしたくなるような状況をつくる必要があるので、地道な情報発信など私にできることは積極的に行っていきたいです。

◆吉原 正宣（よしはら・まさのぶ）氏

2007年関西医科大学卒。洛和会音羽病院形成外科や下北沢病院足病総合センターなどを経て、2018年に「足と歩行の診療所」を開院。日本形成外科学会形成外科専門医、日本抗加齢医学会専門医など。

【取材・文＝医療ライター庄部勇太】

記事検索

ニュース・医療維新を検索